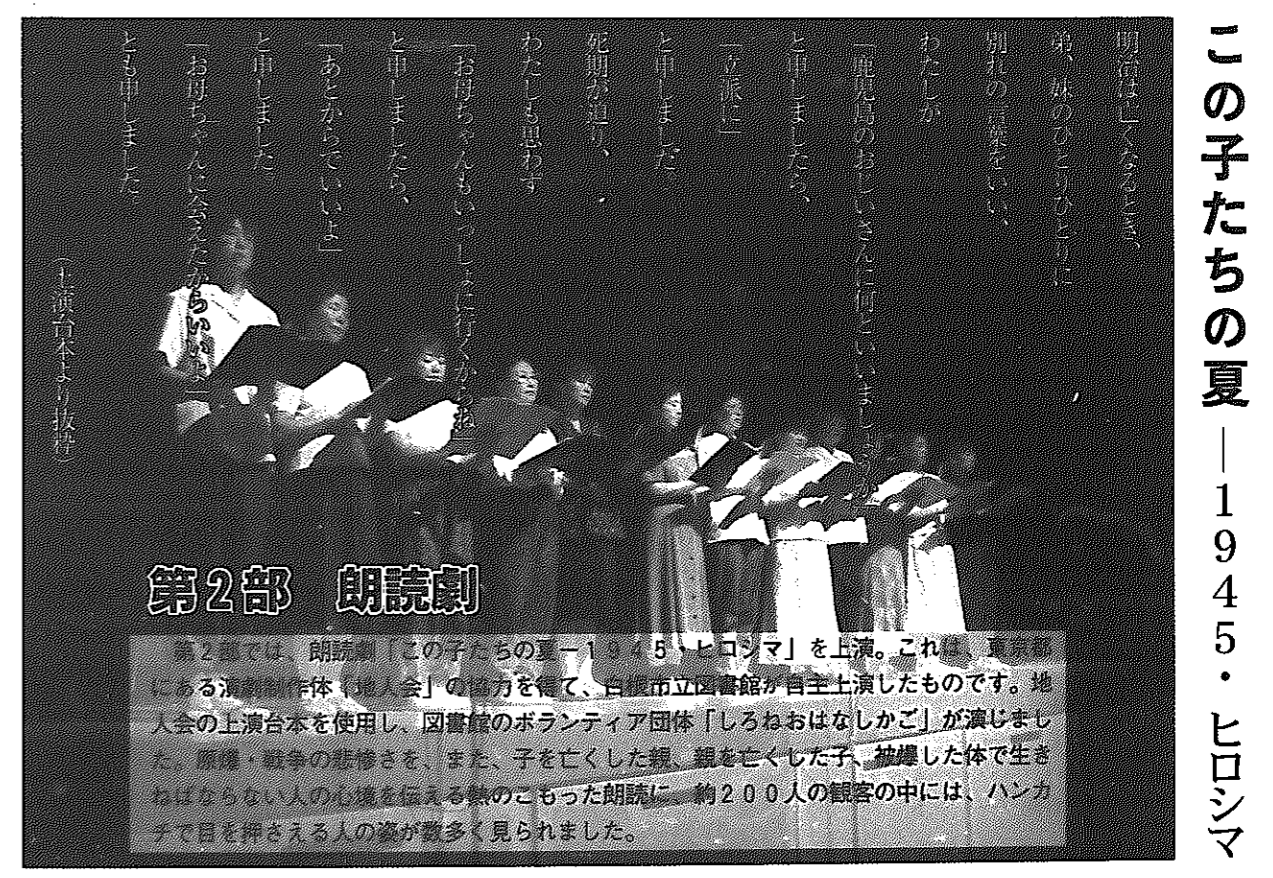


第1部 広島平和祈念式典派遣生徒報告会

忘れないで、あの目のこと ~わたしたちにできること~

- 板垣健太郎君 (白根北中)
- 星 隆宏君 (白根北中)
- 木佑樹君 (白井中)
- 宮島 彩さん (白根第一中)
- 荒井なぎささん (庄瀬中)
- 小柳利恵さん (白井中)
- 笠原文臣校長 (白根第一中)
- 長沼 結さん (白根北中)
- 田村 孝君 (白根第一中)
- 藤井絢奈さん (庄瀬中)
- 小林亜里紗さん (新飯田中)

9月1日、白根学習館のラスベックホールで、非核平和事業「平和をいつまでも」が行われました。第1部の「広島平和祈念式典派遣生徒報告会」では、市内の中学生10人が広島非核平和研修に参加して感じたこと、思ったことなどを発表しました。
8月5日から7日まで行われたこの研修は、平和の尊さを知ってもらおうと市が行ったもので、今年で11回目。平和祈念式典への参列、平和記念資料館の見学などを通じ、生徒たちは原爆・戦争について学びました。各校代表5人の「思い」をご紹介します。



この子たちの夏——1945・ヒロシマ

第2部 朗読劇

第2部では、朗読劇「この子たちの夏——1945・ヒロシマ」を上演。これは、夏島町にある演劇制作体「地人会」の協力を得て、白根市立図書館が自主上演したものです。地人会の上演台本を使用し、図書館のボランティア団体「しろねおはなしかご」が演じました。原爆・戦争の悲惨さを、また、子を亡くした親、親を亡くした子、被爆した体で生きねばならない人の心境を伝える熱のこもった朗読に、約200人の観客の中には、ハンカチで目を押さえる人の姿が数多く見られました。

わたしにできること



小林亜里紗 (新飯田中学校)

初めて訪れた地「広島」は、街に路面電車が走っており、多くの高層ビルが立ち並んでいました。その上たぐさんの緑が広がり、何もかもがそろっていました。五十七年前、この地に原爆が落とされたなんていうように……。わたしは広島に行く前、五十七年前のことについていろいろ調べました。しかし、実際に目にした現実、わたしの想像をはるかに超える恐ろしいものでした。「平和記念資料館」に展示されているその一つ、つがそれを物語っていました。その恐ろしさは口では言い表せないほどでした。また、梶本さんという人は、残酷な戦争のことを思い出してまでも、戦争の恐ろしさを知らないわたしたちに、自分の被爆体験を話してくれました。「次の世代へと受け継いでほしい」。そんな思いを持っているのでしょうか。このよなたしたちにできることです。

広島平和祈念式典に参加して



鈴木佑樹 (白井中学校)

僕は白根市の代表の一人として、八月六日に行われた広島平和祈念式典に参加しました。その中で広島市長は、「第一次世界大戦の記憶が世界的に薄れつつある」と言っていました。実際にその市内では、いつもと変わらぬ風景があったのです。このままでは「忘れられた歴史は繰り返す」という言葉どおり、悲しく惨めな戦争という名の歴史が繰り返されてしまうのです。そうならないためにも、お互いを認め合い、過去を知り、未来をつくっていくなければなりません。現在の平和はたぐさんの犠牲の上に成り立っていることを心に置き、平和の大切さと戦争の愚かさを見つめ、そして次の世代に伝えて、この平和のメッセージが世界中に届けられるように努力したいと思います。

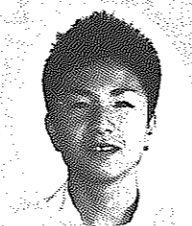
証し



藤井絢奈 (庄瀬中学校)

五十七年も悲しみや苦しみを、怒りを忘れられない人たちの思いがあります。それを生んだのが戦争。アメリカやイギリスからアジアを守るための正しいこと、そう教え込まれた戦争。その過ちに人々が気付いた今、わたしたちに何が残っているのでしょうか。何のためにやっただのでしょうか。どうしてあんなに多くの人たちの命を奪ったのでしょうか。そこからは、ただ「憎しみ」しか生まれていないのに。わたしはこの三日間で生きることの大切さ、命の尊さを知りました。「人間を人間とも思えない姿にした」。わたしの耳にはこの言葉が焼き付いて離れません。今、わたしたちが生きている証しに、あの日一瞬にして消え去った命のために、原爆の恐ろしさを知っている日本人だからこそ、世界に伝えなければならぬことがたくさんあります。人々があんなつらい思いをしないように、もう二度とあんな悲しい涙を見ないように。

復興した広島



板垣健太郎 (白根北中学校)

五十七年前広島に落とされた、たった一発の原子爆弾。それで命を落とした人は数知れません。さらに、現在でも放射能によって苦しんでいる人たちがいます。世界中の人たちに、原子爆弾や戦争は恐ろしいものだと思わせる意識を直してほしいと思います。一人ひとりの意識の仕方によって、やがて大きなものとなり、平和につながっていくと思います。現在の広島はともすれば美しい所です。この美しい広島街のように、平和という文字を掲げて、核兵器のない世界へと変わっていくために、今の僕たちにできることは何なのかを考えていきたいと思っています。

被爆体験談から感じたこと



宮島 彩 (白根第一中学校)

今回、わたしたちに被爆体験をお話くださった梶本さんをはじめ、被爆者の人たちは戦争の本当の被害者だと思っています。差別だつてまだ続いているし、原爆症で苦しんでいる人もいます。わたしは、最後に梶本さんが言った、「正しい戦争などありません。戦争は本当にくだらないものです」という言葉が強く印象に残っています。世界のあちこちで争いはまだ続いているし、核兵器もなくなっていない。また同じ悲劇が繰り返されてしまいます。本当に大切なものは「命」だということ、そしてそれは何物にも変えることにはできないということが、今忘れられつつあります。五十七年前の被害者である人たちの苦しみ、命の尊さを知り、お互いに教え合うことが平和につながるのではないのでしょうか。わたしはそう信じます！